

NEJM 勉強会 2015 年度第 10 回 2015 年 7 月 16 日 A プリント担当：吉原理紗
Case 18-2015: A 241-Year-Old woman with Decreased vision in the left eye and diplopia
(New England Journal of Medicine 2015 June 11; 372(24): 2337-2344)

【患者】 41 歳女性

【主訴】 左眼の視力低下と複視

【現病歴】 入院の 7 週間前までは健康であった。

7 week before 左前頭部に中程度の頭痛があり、6-7 時間で完全に回復した。翌朝起床時、顔面左側にしびれがあり、下眼瞼から口、鼻から耳の範囲であった。他院受診し頭部造影 CT にて出血、腫瘍、またそのほかの頭蓋内異常所見はなかったため帰宅したが、顔面中央の感覚低下はその後 2 週間持続した。(歯科でも異常所見なし)

5week before しびれはなくなったが、左上眼瞼の下垂が出現し、斜めに物が重なるような複視も伴った。ここで二番目の病院を受診、頭頸部の CT にて篩骨洞と左蝶形骨洞の粘膜肥厚、両側上顎洞の air-liquid level を認めた。血算、代謝にて異常所見なく、妊娠反応なし。二週間広域抗菌薬の投与が施行された。数日後、造影 MRI にて副鼻腔炎に一致する所見はみられたが著変なし。視力は正常で、eye patch にて複視を治療。腰椎穿刺、血液培養陰性。

2weeks before 左内側眼窩周囲の痛みが出現。圧迫感、頭痛、複視はなし。その一週間後、複視が再出現し、左目の偏位を伴った。Visual Evoked potential は異常所見なし。左目の視力低下と色覚以上をみとめた。

3days before

悪心と嘔吐が出現し、めまいも伴ったため、浴室で転倒した。複視は持続しており、左眼窩の疼痛は 10 中 5 のレベルであった。

The evening before admission

MRI にて、左蝶形骨洞の前と外側の壁から、左眼窩の尖端部、左海綿静脈洞の後方に向かって異常な軟部組織の存在が示された。(T2 強調画像、造影 T1 強調画像ともに medium) 造影 MRI の冠状断においても、左側の海綿静脈洞とメッケル洞の接合部に異常な高信号が見られた。この画像所見を以て、救急外来受診を勧められた。

On arrival

【既往歴】 hypothyroidism, chronic rhinosinusitis, herpes zoster involving the trigeminal nerve, fibroadenoma (undergone excision)

【家族歴】 Lymphoma (grandfather)

【アレルギー歴】 mold and dust

【薬剤歴】 Levothyroxine, aspirin, calcium, vitamin D, ibuprofen

【社会生活歴】 drink occasionally, no smoking, no illicit drugs

【身体所見】

視力 右 20/20 左 20/400

対光反射 左側の求心路障害あり

石原色覚検査 右 8/8 左 0/8

視野 左目は大きな中心性暗点（末梢視野はのこす）

眼圧正常

眼球運動 左眼に内転、下転、上転に制限あり、外転は不可能

左眼瞼下垂あり

<バイタル>

BT 37.4℃、そのほか正常

【検査所見】

血液検査、腰椎穿刺、尿検査にて特に所見なし。

MRIにて等信号の蝶形骨辺縁部、眼窩先端部、海綿状脈洞に浸潤する異常陰影

